

2月9日

182171h 吉田 知世  
指導教員 藤田 武志

いのち教育の意義に関する研究

—「いただくということ」の実践の検討を通して—

## I 問題の所在

1998年に我が国の自殺者総数は32863人になり、それ以来、年間自殺者数30000人台という深刻な自体が続いている。これは交通事故死者数の4倍以上である。未成年の自殺者数も1998年には前年に比べて、53.8%も増加している(高橋 2005)。

一方、昨今凶悪な少年犯罪が増えているという報道が目立っている。例えば、1997年に神戸で起こった人びとに強い印象を与えた児童殺傷事件の酒鬼薔薇事件や、2004年6月に長崎県佐世保市で女子児童同士の殺人事件がある。このような事件が起こった時に多くの人々が「いのち教育」の必要性を強調したことは記憶に新しい。しかし、新聞記事に「長崎県佐世保市の小六女児殺害事件の衝撃は、今も深い。事件が投げかけた問題の一つは、『いのち教育』の大切さだ。これまで何度も指摘されてきたことだが、子供たちの心には届いていないのかもしれない(2004年6月21日 読売新聞朝刊 大阪版 31面)とあるように、子どもたちに「いのち」の大切さが理解されているかということには疑問を持たざるをえない状況であろう。

宇都宮はこうした子どもが「いのち」の大切さを理解していない状況が生じた背景には「これまで、社会は彼らに死を教えてこなかった。考える機会も十分に与えてこなかった。さらにいえば、私たち自身が死を不吉なものとし、目をそらしてきた面もあるのではないか」という(宇都宮 2005)。

もう一つの「死」からの隔離は屠畜からの隔離である(村井 2001)。1936年の屠畜場法によって許可を受けた屠場以外での大型家畜の屠殺は禁止された。この結果として他の生き物のいのちを奪って生存しているという私たちの食の基本を忘れさせた。村井は現実の死と向き合った子どもたちは逆に生の意味を考えざるを得ないという。

このように、「いのち」の大切さを日常生活で学ぶことができなくなっている現在では、「いのち」の大切さを学ぶ場所として学校教育の役割は大きいと考える。なぜなら、学校は子どもが多く時間を費やす場であるし、様々な友人と関わりあい、意見を交換し合いながら自分の考えを深めていくことができる場所でもあるからだ。

では、現実の死と向き合いたいいのち教育として、学校ではどのような教育をすることができるだろうか。また、死と向き合いながらいのちの大切さを学ぶとは、何をどう学ぶことなのだろうか。そこで本研究では、死と向き合ういのち教育の可能性について考察するため、実際に豚を飼い、出荷し、その肉を食べるという実践を分析する。

## II 本研究の構成

序章 本研究の主題と方法

1 節 問題の所在

2 節 先行研究の検討

3 節 研究の方法

4 節 本論文の構成

第1章 いのち教育とは

1 節 社会のなかのいのち教育

2 節 学問と実践のなかのいのち教育

3 節 いのちを食べる実践

4 節 本章のまとめ

第2章 上越教育大学附属小学校5年生の総合教科の様相

1 節 上越教育大学附属小学校5年2組における総合教科活動の様相

2 節 「いただくということ」の授業のねらい

3 節 本章のまとめ

第3章 総合教科における児童への効果

1 節 総合教科における児童のシートの分析

2 節 ビデオによる授業場面の分析

3 節 本章のまとめ

終章 本研究の結論と考察

1 節 結論

2 節 考察

3 節 今後の課題

## III 本研究の概要

第1章では、いのち教育がどのようなものかを社会的、学問的、実践的という三つの側面から検討した。第一に、社会的には、少年による重大事件がきっかけとなって、いのち教育に関わる提言などがなされており、また、学習指導要領にいのち教育に関わる内容が盛り込まれることで、いのち教育が全国の学校で展開されていたこと。第二に、学問的には、関係によって支えられているいのちへの気づきと感謝という点と、そのように支えられている自分自身のいのちの尊さへの気づきという点の二つからいのち教育が成り立っていることが分かった。第三に、実践的には、生まれてきたいのちに触れるだけでなく、死んでいくいのちに触れることによって、いのちのつながりや自己の尊さに気づかせる実践や、学校が一体となってさまざまな実践を結びつけながら行われるもの、鳥山、黒田、金森による、いのちを食べる実践もあった。

第2章では、上越教育大学附属小学校における「いただくということ」の実践について

紹介し、明らかになったことは、第一に、「いただくということ」の実践は、道德につながる学習活動である総合教科活動に位置づいている。第二に、「いただくということ」の実践の経緯からは、子どもたちが一生懸命に豚の世話をしていたこと、その豚を出荷し、食べるということをめぐって葛藤し、決断していったことが分かった。第三に、「いただくということ」の実践のねらいは、食べることによって、動物のいのちとともに、自分自身のいのちや生きることについて考えさせることであり、また、食べることをめぐって気持ちが揺れたり葛藤したりすることによって、本当の気持ちがあらわれ、考えが深まることを意図していた。

第3章では、「いただくということ」の実践のなかで、子どもたちがどのようなことに直面し、何を学んだのかについて、授業のワークシートとビデオ映像をもとに検討した。その結果、次の5点が明らかになった。第一に、豚の出荷前には「食べる」という意見が多数を占めていたのに対し、出荷直前になるとそれが半減し、いのちをいただくことの意味を考える児童が増加した。第二に、出荷後にはほとんどの児童が、いただくことによって生かされている人間という存在についてワークシートに記すようになった。第三に、「いただくということ」の実践のなかでは、児童がお互いに意見を交わしあうことで考えが深まるとともに、愛情を持って飼っていた豚を食することも乗り越えていった。第四に、肉を食べることは、豚の出荷された後の姿を見届けることであり、おいしさを実感することで、より多くの人に食べてもらいたいという気持ちの変化をも生じさせることであった。第五に、子どもたちが勇気を持って出荷し、その肉を食したことは、飼っていた豚に対する深い愛情に支えられていた。

#### IV 本研究の結論と今後の課題

先行研究で検討した、動物を飼育することによるいのち教育、および、デス・エデュケーションに対しては、以下のような示唆を得ることができた。第一に、「いただくということ」の実践は、上記二つのいのち教育の特徴を併せ持ったものとしてとらえることができることである。しかし第二に、「いただくということ」の実践は、人間の生が他の動物の死の上に成り立っていること、動物のいのちは人間の中に生きること、そういったことへの気づきが生じているところにおいて、上記の二つとはやや異なるように思われる。

次に、鳥山実践、黒田実践、金森実践と「いただくということ」の実践の共通点などについて考察した。飼っていた動物を殺す（黒田実践、「いただくということ」の実践）ことと飼ってはいなかった動物を殺す（鳥山実践、金森実践）のでは児童のその動物への愛着や、動物の気持ちへの寄り添い方に違いが見られた。一方、飼っていない動物を扱う実践では愛着は薄いと考えられるが、目の前でいのちあるものが殺された~~き~~り、自らそのいのちを絶つ経験をしたりしたことは、いのちを奪うことの自覚という点において、児童に訴えかけるものが大きかったのではないだろうか。

黒田実践と「いただくということ」の実践の違いは、飼っている豚を殺すという決断を子どもたち自身がしたかどうかということ、また、その肉を自分たち自身で食したかどうかということだ。「いただくということ」の実践では、殺すということを自分に納得させていくなかで、子どもたちは「いただくということ」の意味をつかんでいった。また、自ら食することによって、豚が出荷された後の姿を見届けつつ、人間に食べられることの意味も実感することができた。しかし、黒田実践では、子どもたちは必ずしもそこには至っていない。その点については、むしろ鳥山実践と金森実践のなかの子どもたちのほうが、「いただくということ」実践のなかの子どもたちと共通した意識をもったのではないだろうか。

「いただくということ」の実践の独自性の一つは、課題が二つあったこと、つまり、愛着を持って育てた動物の出荷と死んでしまった動物に子どもたちが向き合わなければいけなかったことだ。他の実践はどちらか一つの課題のみであった。もう一つの独自性は、子どもたちが動物に愛着を持っていたからこそ、自分たちが普段食べているパック詰めされた肉も生産者が愛情をもって育てた動物なのではないかということや、愛玩動物と産業動物との間に線引きをするのは困難だということに思い至ったことである。それによって、「いただくいのち」はみな尊いということを実感することができたのだろう。

今後の課題は、第一に上越教育大学附属小学校の実践について、4月からの児童の心情の変化を細かく分析することにより、今回の知見をさらに補強することができるだろう。

また二点目として、動物を殺して食べたり動物を飼育したりした他の実践例と比較することによって、殺して食べる実践をめぐる論点を充実させることができるだろう。

そしてこのようないのち教育を受けた児童たちが大人になった時に人格形成の上でどのような効果が表れたかについて考察することで、本研究の知見を検証することもできるだろう。

そして最後に、自分自身の学校現場の実践のなかで、今回の知見を参考にしながら、子どもたちにいのち教育をしていくことが最大の課題である。

## V 主要参考・引用文献

<sup>1</sup>宇都宮直子 2005『「死」を子どもに教える』中公新書ラクレ, pp.15-16.

<sup>1</sup>村井敦志『「いのち」を食べる私たち』教育史料出版会 2001, p.6-7

<sup>1</sup>菊地亜弥子『小学校における「いのち教育」に関する一考察』上越教育大学学位論文

<sup>1</sup>鳥山敏子『いのちに触れる』太郎次郎社 1985.

<sup>1</sup>黒田恭史『豚のPちゃんと32人の小学生一命の授業900日』ミネルヴァ書房 2003

<sup>1</sup>金森俊朗『いのちの教科書』角川書店 2003